

国語学・日本語学におけるテキスト研究

0. はじめに

伝統的な言語学(文法)研究において考察範囲となる最大の単位は長らく「文」であった(この点に関しては構造主義言語学を徹底的に批判して成立した生成文法も構造主義と極めて共通している)が、ヨーロッパでは早くからそれに対するアンチテーゼとして談話・テキストの構造を研究対象とする言語学(テキスト言語学)の必要性が唱えられ、それについての研究が盛んに行われている。

本稿では、「テキスト」を分析対象とする言語学の必要性を「テキスト言語学」と共有する立場に立ち、その観点から先行研究を概観する(なお、本稿では"text"に当たる語として「テキスト」を用いる。また、話し言葉を指す時には「談話」、書き言葉を指す時及び両者を総称する時には「テキスト」という語を用いることにする)。

本稿の構成は次の通りである。

まず、1.において「テキスト言語学／テキスト文法」という概念について規定する。次に、2.ではテキスト言語学に類似した国内の初期の研究を取り上げる。続く3.では日本のテキスト言語学に影響を与えた、ないし、日本のテキスト言語学が参考とすべき海外の研究について若干の論評を加える。その上で4.では各論的研究について論じ、最後に5.において今後の研究の方向性について論じて全体のまとめとする。以下の記述には全体を通じて論者の主観的な理解及び能力不足に起因する誤解が数多いと思われるが、これに関しては諸賢の御寛恕を切に乞う次第である。なお、本文中敬称は省略する。

1. テキスト言語学／テキスト文法とは

「テキスト言語学」は「テキスト」を対象とする言語学の1分野である。テキストとは、「意味的にまとまりをなす文(連続)」のことであり、話し言葉におけるものも書き言葉におけるものもある。また、テキストは1文からなることもあるが、多くの場合2文以上から構成される(この定義は基本的に Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976:1)による)。

言語学の研究対象として「テキスト」が避けられてきた理由は、テキストにおける(不)適格性が文までのレベルにおけるように明確に定義できるものではないと考えられてきたことによるとと思われる。

例えば、日本語の音素の配列として、/botaN/や/taboN/は存在可能である(ただし、存在可能な配列の全てが実際に語として存在するとは限らない)のに対し、/Nbota/は存在し得ないということや、「太郎が怪我をした」は適格な単語の配列からなる文であるのに対し、「が太郎怪我をした」はそうではない、といったことは文脈を考慮せずに決定できるのに対し、同様の現象は文連続のレベルでは見られない(見られにくい)といったことが、テキストを言語学の研究対象とすることへの否定的な反応の原因であると考えられる(言語学における「テキスト」の扱いについては池上嘉彦(1982,1984)も参照されたい)。

しかし、母語話者はテキストレベルにおいても文法能力(grammatical competence)も持っていると思われる現象が存在する。(1)(2)について考えてみよう。(1)と(2)の()には共に

「ガ格名詞句」が入るが、それが主題化される(「は」という形を取る)か主題化されない(「が」の形を取る)かについて考えてみると、日本語母語話者なら、(1)の()には「が」を、(2)の()には「は」を入れると思われる(「は」と「が」を主題と非主題の対立と見る見方については野田尚史(1996)参照)。これが事実であるならば、母語話者は文レベルだけではなく、テキストレベルにおいても一定の文法能力を持っていると考えられよう。

(1) 健はずっと病氣知らずだった。その健()ガンであっけなく逝ってしまった。

(2) 健はずっと病氣知らずだった。その健()還暦祝いの時も一升瓶を一人で空けた。

本稿では、テキストレベルの問題のうち、文法能力が関与する問題を扱う分野を「テキスト文法(text grammar)」、それを含むテキストに関する問題全体を扱う分野を「テキスト言語学(text linguistics)」と呼ぶことにする。

確かに、(1)'(2)'の[]に入り得る命題は「一意的には」決まらないが、(1)'の[]に入り得るのは「ずっと病氣知らずだった」という命題から予測される内容と対立的な内容であり、(2)'の[]に入り得るのはそれと非対立的な内容であるという一般化は可能である。

(1)' 健はずっと病氣知らずだった。その健が[]。

(2)' 健はずっと病氣知らずだった。その健は[]。

以上のことを踏まえ、本稿ではテキスト文法を次のように規定する(ここでの「文法」と「運用論(pragmatics)」の区別は基本的に Leech, G. (1983)に倣ったものである)。

- (I) テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法的現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者が持つ一般化が可能な規則(rule)の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理(principle)の総体」を扱う「運用論」とは区別される。

2. 国内の初期の研究とテキスト言語学／テキスト文法

本節では、テキスト文法を(I)のように規定した場合にそれと対照できるとされる国内の研究を主に初期のものについて見ておくことにする。

2-1. 文章論的研究

テキスト文法を(I)のように規定した時、国内の研究で最も近いのは「文章論」である。「文章論」は時枝誠記(1950)によって唱えられたが、時枝自身はその具体的な定式化を明確に行わなかった(これについて詳しくは南不二男(1995)、永野賢(1986)を参照)ため、文章論は実際は永野賢(1972,1986)、市川孝(1978)、林四郎(1973)等によって具体化されたと言ってもよい(市川らの研究を継承・発展させているものに佐久間まゆみ編(1989)、佐久間まゆみ(1990)等がある)。この内、テキスト言語学と対照可能な意味での文章論を構築しているという点から、ここではまず永野賢(1986)と林四郎(1973)を取り上げ、次に後者との関連において長田久男(1984)についても述べる。

2-1-1. 永野賢(1986)－文法論的文章論－

まず、永野賢(1986)を取り上げる。永野の考える文章論は「文法論的文章論」であり、それはより広義の、文学理解などを主目的とする文章論である「(一般的)文章研究」とは区別される。ここでは永野賢(1986)の中から「文法論的文章論」について最も具体的な発

言を行っていると思われる部分を引用する。

- (3) 「文法」とは、言語表現の全体構造を貫く法則の体系である。そして、言語表現とは、伝達すべき複雑な総体をいくつもの部分的な言語的単位に分析分割し、それらの単位を関係付け順序立てて、時間の延長の上に配列して表出する人間的行為である。(中略)言い換えれば、言語表現上一まとまりの意味を担うと認定される単位としての「語」「文」「文章」の間の関係につき、下位の言語単位から上位の言語単位の構成される原理と法則とを明らかにし、体系的に整理する方法論と、その方法論によって言語表現を分析・考察した成果とが、文法論である。したがって、文法論には「語論」「文論」「文章論」の3つの領域があり、文章論を最終目標とすることになる。(永野賢(1986:22))

ここには「文章論」を「語論」「文論」と対等なものとして捉えようとする姿勢がある。この考え方には、「テキスト」の中に法則性を見いだそうとする、テキスト言語学と共通するものが見られる。しかし、永野の言う「文法論的文章論」と「テキスト言語学」の間には相違点も見られる。次に両者の共通点と相違点を簡単に見ておく。

両者の最大の共通点は、テキストの構造を「言語形式という形態的指標」に基づいて究明しようとする点にある。およそ「文法」というものは表層に現れた要素(若干逆説的な言い方になるが、所謂「省略」された要素もそれが言語的に回復可能である限り、表層に現れたものと同等の性質を持つ)のみを分析の手がかりとすべきであるから、永野の上述の言明に示されている「文法論的文章論」の方法論は妥当なものであると言えよう。

しかし、両者には相違点もある。その最大のものは、「文章論」が書き言葉としての「文章」と話し言葉としての「談話」を完全に別のものとして考えている点にある。確かにテキスト言語学においても話し言葉を対象とする「談話分析(discourse analysis)/会話分析(conversational analysis)」は、書き言葉の分析とは別の分野と考えられがちであるが、それはあくまで方法論上の便宜によるものであって、書き言葉と話し言葉の間には本質的な違いはないというのがテキスト言語学の基本的な立場である。このことは例えば、「(テキストとは)話されたものであるか書かれたものであるかの違いや、長さの違いによらず、統一体をなすものの総称である」という Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976:1)の言明に端的に現れている。このように、話し言葉と書き言葉は別の原理に支配されるものと考えられるのではなく、Ochs, E. (1979)が言うような「被計画性(plannedness)」の違いといった観点から連続的に捉えるべきのものであると考えられる。この点において、永野(及び、市川、佐久間等)の文章論的研究とテキスト言語学の間には相違点が認められる。

2-1-2. 林四郎(1973)-日本のテキスト言語学の出発点-

次に林四郎(1973)『文の姿勢の研究』を取り上げる。同書は小学校2年生の教科書に現れる全ての文をサンプルにして、テキスト(「文章」)の中で文の呼応を問題とする「起こし文型」について考察し、それを「始発型」「承前型」「転換型」(及び「自由型」)に分けて詳説したものである。

この研究の第一の価値は、日本語のテキストを構成する要素を網羅しそれに考察を加えた点にある。これは基本的精神において Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976)と共通するものであるが、それに先行する時期に発表されたものであり、その点でも日本の

テキスト言語学の嚆矢と言うべき極めて重要な研究であると言える。

この研究の第二の価値は、「承前型」の分析において、テキストにつながりをもたらすものとして、「記号(agent)」と「要素(element)」を区別している点にある。これによって、接続詞や指示詞のように語の文法的性質として文をつなぐ能力を持つもの(承前記号)だけでなく、テキストの中で繰り返された要素や、動詞の必須項の中で省略された要素等が(その解釈をテキスト内の他の部分に依存することによって)テキストにつながりをもたらしているということが明らかになった。

2-1-3. 長田久男(1984)―連文的職能の探求―

林四郎(1973)との関連で取り上げる必要がある研究に長田久男(1984)がある。同書は文と文が繋がって構成される「連文」を研究対象とし、連文を連文たらしめている機能を渡辺実(1971)に倣って「連文的職能」と呼び、その具体的な解明に力を注いでいる。

長田の言う連文的職能とは例えば次のようなものである。

(4) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。(川端康成「雪国」。長田久男(1984:88)より)

(5) 信号所では乗客の乗降は取り扱わない。

(4)の「信号所」は辞書項目(lexical entry)ではなく、(5)のような総称文におけるような抽象化されたものでもなく、「国境の長いトンネルを抜けたところにある信号所」という具体的に限定されたものである。このように名詞が文中で限定され、そのことによって文と文の間につながりがもたらされるのは、名詞が「素材表示部の意義」だけを持ち、「関係構成部の意義」を持たない語類であることによる。

長田の研究対象である連文的職能を最も典型的に担うのは指示詞であり、その意味で長田が指示詞の機能を、「(指示語によって)限定される語即ち被限定語を個別的表現の極限に近づけるのに必要にして十分な内容を、自らの位置に持ち込み、持ち込むことによって被限定語を限定し、それによって被限定語を個別的表現の極限に近づける力を持っている」(長田久男(1984:29))と規定したことは重要である。この点を具体的に見てみよう。

(6) 元文元年の秋、新七の船は、出羽の国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難にあつて、半難破船の姿になって、積荷の半分以上を流失した。(森鷗外「最後の一句」。長田久男(1984:31)より)

この例の「その船」はそれだけでは指示対象を持ち得ないが、その指示対象は先行文脈にある単なる「船」ではなく、長田が指摘するように、「元文元年の秋、出羽の国秋田から米を積んで出帆した新七の船」であり、「その」という指示詞(長田は「持ち込み詞」と呼んでいる)の機能はこの下線部の情報を当該の文に「持ち込む」ことにある(ちなみに、庵功雄(1995a)はこの「持ち込み」という概念を「テキスト的意味の付与」と捉え直し、それを利用して文脈指示における「この」と「その」の機能上の差異について論じている)。

2-1-4. 文章論的研究の特徴

上では、文章論的研究をテキスト文法との対比という点で論じたが、ここで、これらの研究に共通する特徴についてまとめておきたい。

永野、市川、佐久間、林、長田らの研究に共通する特徴は、豊富な実例をもとに考察を

しているということと、文章全体の構造化という大局的な問題が扱われているということである。このことの長所はこれらの研究が国語教育や日本語教育に応用しやすいという点であるが、観察された現象の一般化という観点が不十分であるという問題点も含んでいる。

2-2. 久野暲(1973,1978)-談話の文法-

テキストレベルの現象に関する国内の研究において欠かすことができないのが久野の一連の研究(久野暲(1973,1978,1983)、Kuno, S. (1987)等)である。

久野の研究は、生成文法的方法論及びプラグ学派の「機能的な文の見方(functional sentence perspective, FSP)」の影響を受けて成立している。FSPは新情報・旧情報という概念を相対化したもので、テキスト内の新情報・旧情報の(無標の)分布を旧→新という情報の流れで説明したものである(FSPについて詳しくはこれを「伝達力学(communicative dynamism)」という観点から定式化している Firbas, J. (1964,1992)等を参照されたい)。

久野の研究の中で FSP の影響が最も大きいのは久野暲(1973)の「ハ」と「ガ」に関する議論及び久野暲(1973,1978,1983)等の「省略」に関する議論である(久野の研究と FSP の関連については久野暲(1973:216-7)に久野自身による説明がある)。久野は、前者に関しては「主文の主語に現れる「ガ」は、名詞句がその文の中で、新しいインフォメーション(即ち、文脈から予測することができないインフォメーション)を表すことをマークする標識である」(久野暲(1973:210))と述べ、後者に関しては「省略は、重要度の低いインフォメーションを表す要素から、重要度の、より高いインフォメーションを表す要素へと、順に行なう。すなわち、より重要なインフォメーションを表す要素を省略して、重要度のより低いインフォメーションを表す要素を残すことはできない」(久野暲(1983:117))と述べている。

このように、久野の研究は「は」と「が」や省略といった現象が情報の新旧という一般性の高い原理によって説明され得るということを示した点で高く評価できるものである(久野の方法論をもとに日本語と英語の受身文、後置文を対照した研究に高見健一(1995)がある)が、問題点も存在する。その最大のものは、その研究の射程が「談話」の中の極めて形式文法に近い部分に限られているという点にある。実際、久野が「談話の文法」の一部として取り上げる「視点」という概念は、西山佑司・上林洋二(1985)が指摘しているように文文法レベルの問題であるとも考えられるし、西山佑司(1979)、西山佑司・上林洋二(1985)の議論が正しいとすれば、上述の「は」と「が」や省略に関する議論も文文法(形式文法)と運用論の組み合わせで説明できることになり、久野の研究を「談話の文法」と呼ぶ必要はなくなる。

このように、久野の研究は必ずしも「談話の文法」と呼べない可能性があるが、このことは久野の研究の価値を損なうものでも、「談話の文法(テキスト文法)」の存在を否定するものでもない。前者について言えば、たとえそれが談話の文法ではなくても、久野が問題としている点は依然として「省略」について考える際の必要条件である。一方、後者について言えば、(1)(2)で見たような問題や指示詞に関する問題等は連文によって構築される言語的文脈を考察することなしには解決できないものであるので、いずれにせよ「テキスト文法」というものを設定する必要があることに変わりはない。

3. 海外の理論

本節では日本のテキスト言語学に重要な影響を与えた、ないし、日本のテキスト言語学が参考とすべきであると考えられる海外の文献のいくつかを取り上げる。

3-1. de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981) — テキスト言語学の理論的枠組み —

最初に取り上げるのは、de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981) *Introduction to Text Linguistics* である。この文献は、テキスト性(textuality、テキストをテキストたらしめる性質)を構成する要因を7つ取り上げ、その各々を検討している。その7つの要因とは、結束性(cohesion)、一貫性(coherence)、意図性(intentionality)、受容可能性(acceptability)、情報性(informativity)、状況適合性(situationality)、テキスト間相互関連性(intertextuality)である。

このように、テキスト性という概念を具体的に捉えるための枠組みを示した点もこの文献の価値であるが、それ以上に重要なのは、テキストを、言語的知識という「潜在的体系(virtual system)」から具体的な選択が行われてできる「実現的体系(actual system)」として捉えている点である。つまり、テキストは(文以下のレベルの)文法体系のような実時間に制限されない体系ではなく、実時間内で様々なレベルでの選択を同時に行って形成していかなければならないものなのである。こうしたことが可能になるためには、テキスト解読者(decoder)はテキストの解釈に際して、「デフォルト(default)」の選択肢を持っていなければならない。デフォルトとは、「その反対の指定がなされない限り前提とされる」(de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981:34))選択肢である。テキスト送信者(encoder)とテキスト解読者はこうしたテキスト解読ストラテジーを共有することによって、実時間内で容易にテキスト解読を行っていると考えられる。

3-2. Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) — 結束性の研究 —

文連続が単なる文の羅列ではなく全体で一つの意味的まとまりをなす時その意味的まとまりを「テキスト」と言うが、この時、文連続に意味的まとまりを与えるもの(の中の最も重要な一つ)が「結束性(cohesion)」であり、西洋言語学においてこの結束性を研究対象とした記述を初めて行ったのが、Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English* (以下、H&Hと略称)である(なお前述のように、日本では林四郎(1973)が同書の発表以前に既に同様の研究を行っていた)。

結束性とは、同書の定義によれば、「ある要素がその解釈を他の部分に依存し、そのことによって文連続をテキストたらしめること」(H&H:4)である。例えば、(7)b. は単独では存在し得ない文である。なぜなら、単独の文として考えた場合には“them”の指示対象が決められないからである((7)はH&H:2より)。

(7) (a) Wash and core six cooking apples. (b) Put them into a fireproof dish.

即ちこの場合、(7)b. は“them”の解釈を他の部分(言語的文脈。この場合は(7)a.)に依存することによって、(7)a. と一体化して全体で一つのテキストを構成している。

テキスト言語学の理論におけるこの文献の価値は次のような点に見いだされる。

第一は、「テキスト内指示(endophora)」と「テキスト外指示(exophora)」とを区別し、「テキスト外指示は結束的ではない」(H&H:18)としてその機能の違いを明確にした点である。テキスト内指示は照応が言語的文脈内で完結するもので、テキスト外指示は照応が言語的

文脈内では完結しないものである。例えば相手が手にした本を指さして(8)を発することは可能だが、その時(8)が他の文を「引きつけて」一体となるということはない。

(8) その本は面白かった。

これに対し、(9)の「その本」は先行文脈で言及されている「本」(より厳密には「先生協で買って読んだ本」と同一物指示にならなければならない、そのことによって、この2文がテキストになることに貢献している。

(9) 先生協で本を買って読んだ。その本は面白かった。

なお、第一の点に関連して、「1、2人称は本質的にテキスト外指示的であり、3人称はテキスト内指示的である」(H&H:48)という指摘も重要である。これは、1、2人称は「話し手」「聞き手」という発話役割(speech role)を指すのに対し、3人称は特定の個体を指すということに基づいている(1、2人称と3人称とのこの区別は基本的に、Benveniste, É. (1966)の言う「人称」と「非＝人称」の区別に対応する)。このことから例えば、「I saw a boy at the park.」、"Did you see a boy at the park?"等は談話の初めでも使えるのに対し、"He saw a boy at the park."等はそうではない(もし使うと、"Who saw?"等の疑問文を誘発する)といったことが説明できる。また、日本語についても、「公園で男の子を見ましたよ」「公園で男の子を見ましたか」は(1、2人称の代名詞が「省略」されているにもかかわらず)談話の初めでも使えるのに対し、「公園で男の子を見たそうです」はそうではなく、「えっ、誰が?」といった疑問を誘発するといった現象が見られる。

H&Hの第二の功績は、照応の中に「指示(reference)」と「代用(substitution)」という二つの異なるタイプのものを見出したということである。紙幅の関係で詳しくは述べられないが(この点について詳しくは安井稔・中村順良(1984)を参照されたい)、「指示」では先行詞とその表現の関係が意味的であるのに対し、「代用」では両者の関係は統語的で、指示対象は表層にそのままの形で存在する。英語で「指示」に属するのは、定冠詞、指示(代名)詞、人称代名詞等であり、「代用」に属するのは、so, one, 動詞句削除等である。なお、庵功雄(1996)はこの「指示」と「代用」の区別が日本語でも有効であることを論じている。

ここまで H&H の功績について述べたが、この研究にも問題点は多い。その最大のものは、テキストの形成に際して、語彙・文法的な手段である「結束性」しか考慮していないということである。実際には、(10)のように、表層には何ら結束性に関わる要素が存在しない文連鎖がテキストになっていることも多い。つまり、テキストの構成に関わるものには、Widdowson, H.G. (1978)等が言うように、「結束性」だけではなく、「一貫性(coherence)」といったレベルのものも存在するのである。

(10) A: 電話だよ。

B: 俺、今風呂に入ってた。

A: 分かった。(Widdowson, H.G. (1978)より)

3-3. Givón(ed. 1983)―主題連続―

最後に取り上げるのは Givón の研究である。Givón はいくつかの文献においてテキストについて論じているが、その中で特に重要な概念が「主題連続(topic continuity)」というものである(cf. Givón(ed. 1983))。主題連続とは、テキストの中である文の主題(topic)がどのように、保持されたり切り替わったりするのかということであり、それを究明することによ

って、テキストの構造がより明らかになると考えられる。

例えば、Givón(1983)では口語英語には主題連続を表すための装置としてゼロ、代名詞、右方転移(right dislocation. e. g. He hit Mary, John. (あいつがメアリーを殴ったんだよ。ジョンが))、指示代名詞、定名詞句(definite NP)等があり、先行詞からの距離や(当該名詞句の)テキスト内での重要度に応じて使い分けられている、と述べられている。つまり、主題が連続している時は原則的にゼロや代名詞が使われるのに対し、主題が変わる時は定名詞句が使われるということである。英語の母語話者が代名詞と定名詞句とを用いてテキストを構造化していることは心理言語学的な実験(e. g. Karmiloff-Smith, A. (1980))からも明らかである。この主題連続という概念が究明されれば、永野賢(1986)、市川孝(1978)等で分析の出発点とされている「段落」「文段」といった概念が話し言葉ではどのように表現されているのかといったことも明らかになると思われる。

3-4. その他の研究

本節の最後に、紙幅の関係で取り上げられなかった研究で特に重要なものを挙げておく。

まず Weinrich, H. (1973,1976)を取り上げる。前者はテキスト内のテンス形式の機能を論じたもので、Jakobson, R. (1957)、Benveniste, É. (1966)等と共に、後述の工藤真由美(1995)の研究に影響を与えている。後者はテキスト言語学の方法論を多角的に論じたものだが、その中でも「移行」という概念が特に重要であると思われる。

その他では、de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981)等とは異なる視点からテキスト言語学を理論的に論じた van Dijk, T. (1977,1981)や、前述の Firbas, J. (1964,1992)らの「機能的な文の見方(FSP)」や、Halliday, M. A. K. (1967,1970,1985)の機能主義的分析も重要な視座を与えてくれる。さらに、話し言葉と書き言葉の両面にわたって情報に関する問題を扱った Chafe, W. (1994)も重要である。また、テキスト言語学一般では運用論との関わりが重要になるので、Grice, P. H. (1975)の「協調性の原理(cooperative principle)」や、Sperber, D. & Wilson, D. (1986)の「関連性理論」、Leech, J. (1983)等も考慮する必要がある。また、後述する談話管理理論の基となっている「メンタルスペース理論」(Fauconnier, G. (1984))、談話中の話し手／聞き手の知識状態の実時間的変化を捉える「談話表示理論(discourse representation theory)」(Kamp, H. & Reyle, U. (1993)etc.)や「状況意味論(situational semantics)」(Barwise, J. & Perry, J. (1983)etc.)等も重要である。なお、関連性理論については西山佑司(1983)が、メンタルスペース理論については Fauconnier, G. (1984)の日本語訳(坂原茂他訳(1987))の「解説」や坂原茂(1989)が、談話表示理論や状況意味論については白井賢一郎(1991)が詳しい。

会話分析の分野ではその理論的全体像を論じた Stubbs, M. (1983)、Brown, G. & Yule, G. (1983)、この分野における言語学的分析の嚆矢の一つとも言うべき Tannen, D. (1984)、エスノメソドロジ的立場から話者交代(turn-taking)を論じた Sacks, H. et al. (1974)、“Oh”、“y’know”等の感動詞(的表現)を談話中の参加者の心的状態を表示する談話標識(discourse marker)として位置づけた Schiffrin, D. (1987)等が重要である。また、教室場面の談話の記述の枠組みを示した Sinclair, McH. & Coulthard, M. (1975)も興味深い。

4. 最近の国内の研究

本節では、2節、3節で概観したような方法論を観点として、80年代後半からの国内の研究を見ていくことにする。

ここでは便宜上、話し言葉(談話)を主たる考察対象としている研究と、書き言葉(テキスト)を主たる対象とする研究に分けて記述することにする。

4-1. 談話の研究

談話の研究は、談話管理理論に基づくもの、接続表現に関するもの、会話の構造に関するもの、の3つに大別できる。以下、この順に論じていく。

4-1-1. 談話管理理論に基づくもの

まず、田窪行則(1989,1990a,1990b,1992)、金水敏(1988,1992,1993)、金水敏・田窪行則(1990,1992)、田窪行則・金水敏(1996)等で論じられている、「談話管理理論」に基づく研究を取り上げる。

談話では話し手、聞き手が持つ知識は刻々と変化していく。談話は話し手と聞き手が話の内容に関する知識を常に管理しながら進めていく共同作業として捉えることができる(このことはある程度まで書記言語によるコミュニケーションであるテキストにおいても成り立つ)。談話管理理論はこうした、談話における話し手、聞き手による知識の管理のあり方を捉えようとする理論であり、Fauconnier, G. (1984)のメンタルスペース理論を参考に構築されている。この理論では話し手及び聞き手の知識はメンタルスペースと呼ばれるいくつかの領域に分かれて格納されていると想定される。言語表現(典型的には指示詞、終助詞等の機能語)は、アクセスされているスペースの種類やアクセスの仕方、スペース内の要素の属性の変更(e. g. 不定→定)等を表す。この理論における日本語についての考察で重要な前提は次の2点である。

(11) a. 日本語では、直接経験的知識と間接経験的知識を言語的に区別する。

b. 聞き手知識は、間接経験的知識の中に埋め込まれている。(金水(1992))

この(11)から説明される現象として挙げられるのは、a)「という／って」を固有名詞に付加するか否か(田窪行則(1989))、b)「は」と「が」の使い分け(田窪行則(1990))、c)「だろう」の推量用法と確認要求用法の統一的解釈(金水敏(1992))、終助詞「よ」と「ね」(田窪行則(1992)、金水敏(1993)、田窪行則・金水敏(1996))、d)三人称代名詞(木村英樹・田窪行則(1992))、e)反事実条件文(田窪行則(1993))、f)談話標識(田窪行則(1992)、定延利之・田窪行則(1995))、g)指示詞のア系統とソ系統の差異(金水敏・田窪行則(1990,1992)、田窪行則・金水敏(1996))等である。この内まず、g)について述べ、a)-f)に関しては紙幅の関係上、a)b)についてののみ言及することにする。

4-1-1-1. ア系統とソ系統

指示詞の「文脈指示」用法におけるア系統とソ系統の違いについては、久野暉(1973)以来、堀口和吉(1978)、黒田成幸(1979)、Yoshimoto, K. (1986)等で盛んに論じられた(指示詞の研究史については金水敏・田窪行則(1992)を参照)。その議論の出発点となったのは次のような例である。

(12) A: 昨日、山田さんに会いました。あの(／*その)人、いつも元気ですね。

B: 本当にそうですね。

(13) A: 昨日、山田さんという人に会いました。その(／*あの)人道に迷っていたので助けてあげました。

B: その(／*あの)人、ひげを生やした中年の人でしょ。

こうした例のソ系統とア系統の使い分けについて久野暁(1973)は次のように述べている。

(14) a. ア系統: その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いる。

b. ソ系統: 話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

これに対し、田窪行則・金水敏(1996)は、このように話し手が聞き手の知識を想定して形式を使い分けると考えると、話し手は「『聞き手が命題Pを知っている』こと」の他に、「『話し手が聞き手がPを知っている』こと」を聞き手が知っている「こと」を知っていることが必要となるというように埋め込みがどんどん深くなってしまいますので、そうした共有知識に依拠するモデルは不適切であるとし、その代わりに次の原則を立てている。なお、この場合(11)b. より聞き手の領域は話し手の間接経験領域の中に埋め込まれる。

(15) a. ア系統は話し手の直接経験領域にある要素を指す。

b. ソ系統は話し手の間接経験領域にある要素を指す。

このように説明することで、仮定的な場合(e. g. (16))や相手の発話によって導入された要素(e. g. (17))等が一貫してソ系統でしか指されないことが説明できる。

(16) もし、特急が止まっていたら、それ／*あれに乗ろう。

(17) A: 昨日、山田さんに会ったよ。

B: その／*あの人、誰?

このア系統とソ系統の使い分けについてはこの説明が最も適切なものであるが、この談話管理理論に基づくアプローチでは同じ文脈指示のコ系統とソ系統の使い分けを予測可能的に述べることは困難であると考えられる。これについては庵功雄(1994)を参照されたい。

4-1-1-2. その他の現象

次に指示詞以外の現象を部分的に概観する。まず、上述の a) は次のような現象である。

(18) A: 昨日山田君に会いましたよ。

B1: 山田君、元気そうでしたか。

B2: 山田君って、誰ですか。

(19) A: 昨日山田君という人に会いましたよ。

(18)において、Aが談話に導入した「山田君」を聞き手のBが知っている(「山田君」がBの直接経験領域にある)時、Bは「山田君」を指すのに裸の「山田君」という形を使えるが、「山田君」のことをBが知らない(「山田君」が、Bにとって言語的情報に基づく概念的知識によってしか同定できない間接経験領域以外に存在し得ない)時、Bは「山田君って／山田君という人」といったメタ表現を使わなければならない。また、Bが「山田君」のことを知らない(とAが想定する)場合もやはりAは、(19)のように、「山田君とい

う人」といったメタ表現を使わなければならない。

次に、b)は、「は」を「先行談話で導入された要素、および談話の初期値にすでに存在している要素の集合の中からある要素を取り出す」(田窪行則(1992:839))機能を持つもの、(当該の)「が」を「事態、現象を談話に導入する」(同前)機能を持つものと規定し、その上で、日本語の「が／は」と韓国語の「i/ka(が)／ un/nun(は)」を対照したものである。即ち、日本語では聞き手が知っていると話し手が想定するものは「は」でマークされるので、その後に疑問詞が続く名詞句は「は」でマークされる。従って、日本語では「大阪大学は／*はどこですか」となる。なぜなら、こうした疑問文を聞き手に発するのは聞き手が「大阪大学」のことを知っていると話し手が想定しているからに他ならないからである。一方、韓国語では先行文脈で導入された要素や一般知識等以外は聞き手が知っている情報とは見なせないで、"oosaka-tayhakkyo-ka/*-nun eti issupnikka?((lit.)大阪大学が／*はどこにありますか)"となるのである。

この談話管理理論によるアプローチは日本語の談話研究において極めて有効な理論となる可能性が高い。それは日本語が直接経験による情報と間接経験による情報との区別に敏感な言語であることによる(この点については神尾昭雄(1990)も参照)。また、この理論は対照言語学的比較のモデルとしても優れている(例えば、金水敏・田窪行則(1990)の「指示トリガー・ハイアラーキー」や木村英樹・田窪行則(1992)における日英中仏語の三人称代名詞の比較を参照されたい)。ただし、この理論はあくまで話し手と聞き手とから構成される「談話」を対象とするものであるので、聞き手性が希薄になる「テキスト」の分析において十全たる威力を発揮できるかどうかには疑問の余地がある。

4-1-2. 接続表現に関する研究

談話を考える上で重要なものの一つに接続表現がある。「接続表現」という表現は品詞論的な用語である「接続詞」より広い範囲の形式を含めたもので、具体的には、所謂接続詞の他に「話は変わりますが」「ということで」等も含まれる。また、「ああ、さあ、まあ」等の感動詞(の一部)が持つ「談話標識」としての機能を扱った研究も併せて扱う。

初期の接続表現の研究は(当時は品詞論的な見方が強かったので「接続詞」という形でしか論じられていないが)、統語的分類(佐伯哲夫(1967)等)や用法的分類(塚原鉄雄(1968)、佐治圭三(1970)、市川孝(1978)等)が中心で、その分析は静的な性質が強かったと言える。また、書き言葉(テキスト)の用法を中心としているのも特徴的である。

一方、1980年代後半から談話／テキストの構造の解明という観点からの接続表現研究が盛んになってきた。この立場の重要な特徴に研究対象が話し言葉(談話)に移ったということがある。こうした路線上に位置づけられる研究に蓮沼昭子(1991,1995)、浜田麻里(1991,1993,1995a,1995b)、メイナード泉子(1993)、Maynard, S. K. (1993)、川越奈穂子(1995)等がある。また必ずしも談話を対象とした研究ではないが、北野浩章(1989)、山森良枝(1990)等も重要な知見を含んでいる。

ここでは、メイナード泉子(1993)、蓮沼昭子(1995)、浜田麻里(1991)を取り上げる。

メイナード泉子(1993)は「会話分析」という立場から日本語の談話を分析した先駆的研究であるが、その第10章で接続詞「だって」について論じている。そこでは「だって」が英語の"But"にも"Because"にも対応するとし、その機能を次のようにまとめている(p. 189)。

(20) 「XだってY」における「だって」の機能

X=会話参加者がとる、又は暗示する「立場」。

Y=Xを「支持」するための話者の情報及び発話行為、であり、

コンテキスト=「立場」Xに「反対」又は挑戦する状況、の時、

「だって」は、話者が「自己正当化」することを前もって知らせる役割を果たす。これにより、次の(21)の「だって」はAの行為への疑問を提示するという「反対」の関係と、最終的にAの行為を「支持」するという二重の関係を同時に表しており、そのために、英語では"But"でも"Because"でも表せるのだと説明している。

(21) A1: 少し休暇をとろうかな。

B1: だって、ずっととってないんでしょ?

A2: うん。 B2: それならとったら。(メイナード泉子(1993:189))

これに対し、蓮沼昭子(1995)は(21)B1が「支持」しているのは(21)B2の発話であるとし、「だって」の用法を、a)抗弁型、b)挑戦型、c)補足型、d)折衷型に四分している(私見ではa)とb)を区別する必要はないように思われる)。

その上で、蓮沼はこれらに共通する特徴を「だって」の意味を「OけれどもP(なぜなら)Qだから」と規定して説明している。なお、メイナードや蓮沼が扱っているような問題を考えるためには van Dijk, T. (1979)の言う「意味論的接続詞(semantic connective)」と「運用論的接続詞(pragmatic connective)」の区別が有効であると思われるが、紙幅の関係でその詳細は割愛する。

次に浜田麻里(1991)「デハ」と推論」とを取り上げる。ここで浜田は「デハ系接続語((ソレ)デハ、(ソレ)ナラ、(ソレ)ダッタラ、(ダト)スルト等を含む。以下デハと略称)」の特徴を新規情報の取り入れと規定し、デハが推論過程を持つことを明らかにしている(日常言語における推論については坂原茂(1985)を参照)。これから例えば(22)A2はよいのに(23)A は不自然になる理由が分かる。なぜなら、(23)A は(i)の段階で既に当該の情報(桃子たちがいつごろ来るのか)についての意見を持っており(i.e. 当該情報は既知となっており)、(ii)の段階で(i)を入力として推論する必要がないからである((22)-(24)は浜田麻里(1991)より)。

(22) A1: 何時ごろ来るかしら、桃子さんたち…

B: お昼からって言ってたから、3時頃からじゃないか…

A2: じゃ、急いで行って来るわ。

(23) B: 何時ごろ来るかなあ、桃子たち…

A: (i)お昼からって言ってたから、3時頃からじゃないかしら…(ii)*じゃ、急いで行って来るわ。((22)A2と同じ用法としては不適格)

また次のような現象もある。即ち(24)A への答えとしてB1はよいが B2は不自然である。

(24) A: すみませんが、少々お待ちいただけますか。

B1: じゃ、また出直します。 B2: *じゃ、はい。

これは次のように説明できる。(24)の場合、デハには推論過程があるので、[相手が待ってくれと言っている]→[(なぜそう言っているかという)忙しいからだろう]→[(忙しいのなら)出直した方がよい]といった推論過程が経た発話として解釈できる B1はよいが、そうした推論過程が読みとれない B2は不適格になるのである。

浜田の研究にはこの他にも浜田麻里(1993,1995a,1995b)等があるが、いずれも接続表現を

通して談話の構造を明らかにしようとするもので極めて興味深い。

以上の他に、「聞き手情報配慮理論」(森山卓郎(1989a))の枠組みから、応答と談話標識について論じた森山卓郎(1989b)も重要な知見を含んでいる。

4-1-3. 談話の構造に関する研究

談話に関する3つ目のタイプとして挙げるのは、談話の構造に関する研究である。これはいわゆる会話分析に当たるが、現在のように会話の録画・録音のための装置が発達する以前から談話の構造を捉えようとする試みが存在したことを忘れてはならない。

そうした話し言葉を対象とする初期の研究で最も重要なものは三尾砂(1942)『話言葉の文法(言葉遣篇)』である。三尾はそれまで文法の研究対象と考えられていなかった「話言葉」における「言葉遣」を扱ったもので、その中で最も重要な概念は「文体」である。日本語の文は文末では基本的に「だ体」「です体」「ございます体」という3つの文体の対立を持つ(この場合その文は「文体性を持つ」と言う)が、従属節の場合は全てがこの対立を持つわけではない。例えば、(25)b. は(25)a. よりも丁寧であると感じられるが、(26)のような連体節の場合は(26)b. のような「です体」の使用は余剰的に感じられる。これは「けど節」の方が連体節よりも主文への従属度が低いことを示している。なぜなら、文全体の丁寧さは主文末の「文体」が決定するからである。

(25) a. 先日本を読んだけど、面白くなかったです。

b. 先日本を読みましたけど、面白くなかったです。

(26) a. 先日読んだ本は面白くなかったです。

b. ?先日読みました本は面白くなかったです。

三尾はいくつかの接続助詞について、文末が「です体」である時にその接続助詞の前が「です体」になる割合をいくつかの戯曲の用例から算出し、「丁寧化百分率」として示している(三尾砂(1942:279-81))。この丁寧化百分率は三上章(1953)、南不二男(1974)等に受け継がれ、日本語の複文の研究に大きな影響を与えた。

次に取り上げるのは国立国語研究所(1960,1963)『話しことばの文型(1)(2)』である。これは当時使われ始めた録音機を用いて談話を録音し、その書き起こしデータから話し言葉で使われる「文型」を抽出しようとしたものである。この研究の最大の価値は、何と言っても初めて戯曲や小説等の「書かれた会話」ではないものを資料に研究を行ったということである。もちろん、ここでは実験的な手法が多く用いられており、自然さ(authenticity)という点では完全ではないが、「表現意図」「イントネーション」等の極めて扱いが困難な問題に正面から取り組んだ研究として、未だにその価値を失わないものであると言えよう。

三尾の研究は(時代的制約のために)戯曲等を資料として使っているという点において、国立国語研究所の研究はその中に実験的な手法が多く取り入れられているという点において、いずれも自然さという点では不十分な点を持っている。もちろん、「自然」であることが望ましいあるいは必要であると無条件には言えないが、少なくとも会話の構造を調べるための手段の一つに「自然な会話」をデータとするということがあことは認める必要がある。そうした問題意識の下になされているのが「会話分析」という方法論である。

そうした会話分析の例としてここではメイナード泉子(1993)を取り上げる。これは日本語で書かれた「会話分析」の本としては初めてのものであり、調査法や方法論について傾

聴すべき議論がなされている。ただし問題点も多く指摘できる。

問題点の第一は、ここで扱われている現象が果して「会話分析」によらなければ明らかにできないものなのかということである。例えば、同書で扱われている、「よ」と「ね」の違いや「だって」の分析には「書かれた談話(シナリオ等)」から用例を得た研究との違いがあまり感じられない。同書で強調されているように、一般に会話分析ではデータ収集が非常に難しく、それだけ「コスト」がかかる。そうである以上、そこから得るデータは「自然談話を分析しなければ得られない」ものである必要があると思うのである。

もう一つ論者がここで問題としたいのは、会話分析の結果筆者が引き出した結論が、日本文化は「思いやり文化」であるといった極めて社会学的性格の強いものであるということである。社会学的研究はもちろん重要である。しかし、社会学的研究と言語学的研究とは自ずから目指すものが違うはずである。会話分析を社会学や人類学の中に位置づける(エスノメソドロジ的方法論による会話分析はそうしたことを目的としていると思われる)のならそれはそれで問題ないが、筆者は Tannen, D. (1984)等の「言語学的アプローチ」を採ると主張しているように見える。筆者が繰り返し述べているように、会話分析が分析の手段であるにすぎないとしても、「手段」が言語学的であるならその「結論」も言語学的でなければならないのではないか、これが論者の印象である。

会話分析の研究としてはこの他に勧誘表現を扱ったザトラフスキー=ポリー(1993)も重要である。また、雑誌『日本語学』における発話行為の特集、「謝罪」(1993:vol.12-12)、「感謝」(1994:vol.13-8)、「依頼」(1995:vol.14-10)に所収の論文等も参考になる。

4-2. テキストの構造に関わるもの—結束性を中心に—

4-1. では談話(話し言葉)に関する研究を取り上げた。ここではテキスト(書き言葉)に関する研究を主に「結束性」という観点から概観してみたい。

4-2-1. 主題連続に関する研究

まず、取り上げる必要があるのがベケシュ=アンドレイ(1987)である。ベケシュはパラフレーズ(要約)という実験的手法によって母語話者がどのようにテキストを構造化しているかを明らかにしようとしている。実験の具体的な手順は、一つのテキストを単文に分けたものを被験者に提示し、それを書き直してもらうというものである。これにより、文をつなぐ時に母語話者がどのような結束装置(cohesive device)をよく使っているのかが分かる。さらに結果を、類似した要素をまとめていく統計学上の手法であるクラスタ分析にかけてテキストの構造化の実相を明らかにしている。また、ベケシュ=アンドレイ(1995)はベケシュ=アンドレイ(1987)の分析方法に、その名詞句が最後に言及されてからの節内での距離を示す指示的距離(referential distance, RD)という概念を加えて「この」と「その」の分布の差異を考察している。

この研究の長所は、定量調査によって、テキスト形成に際し母語話者が利用できる結束装置の中でどのような要素が使われやすいのかを明らかにしたところにある。例えば、ベケシュ=アンドレイ(1995)の「省略及びソノ+NPは短いRDで使われるのに対し、コノ+NPにはそのような傾向性は見られない」という実験結果は興味深い(ちなみにこの結果は、実際の文章を対象にした大野美代子(1978)の計量的な調査の結果とも、「この」は「話

し手／書き手が先行詞をテキストのトピックとの関連という観点から捉えていることを示すマーカー」であるのに対し、「その」は「話し手／書き手が先行詞をテキストの意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカー」であるとする庵功雄(1996)の結論とも一致する)。一方、この研究の短所は結論が結果論に陥りやすいということである。つまり、この方法では操作可能な一般化は困難なのである。

ベケシュ=アンドレイ(1995)の他に日本語の主題連続を扱ったものには、Hinds, J. & Hinds, W. (1979)、Hinds, J. (1983)、Clancy, P. M. & Downing, P. (1987)等があるが、そこで明らかになったのは、テキストのタイプによって結束性の表され方が異なるということである。例えば、Hinds, J. (1983)が扱っているような昔話(folktale。語り手が談話を計画する度合いが相対的に高い)では主人公が「は」でマークされる率が高いが、Clancy, P. M. & Downing, P. (1987)が扱っているような計画性の低い談話ではそのような全域的な「は」の使用は少なく、「は」は局所的に対比的な意味で使われることが多い。これは日本人母語話者が持っている物語構造に関する規範意識とその使用実態の違いを表しているものとも解釈できる(テキストの計画性が低くなるにつれて、直前の文脈への依存性が高まることは Ochs, E. (1979:62)も指摘している)。

4-2-2. 省略をめぐる

結束性を表す手段の中で「省略」に関する研究もある。この問題は、上述のように、林四郎(1973)や久野暉(1978)も論じているが、その後、畠弘巳(1980)、砂川有里子(1990)、清水佳子(1995)、甲斐ますみ(1995)等によって論じられている。この内、畠や砂川は文章における名詞句の省略を結束性を作り出したり、テキストに境界を設定する装置と考えている。一方、清水は省略の可否に文のタイプの違いが関与すると主張しており、甲斐はこの問題への運用論的アプローチを試みているが、これらに共通するのは省略を結束性という観点から捉えようとしている点である(三上章(1970)の言う「ハのピリオド越え」という現象も同様に位置づけられると思われる)。一方、山田敏弘(1996)のように「省略」をテキスト内の「参与者追跡システム(reference tracking system. cf. Comrie, B. (1989)、Foley, W. A. & Van Valin, R. D. (1984)」という観点から捉えようとする研究もある(久野暉(1978)の省略に関する議論もこの立場に位置づけられよう。さらに神尾昭雄(1986)も参照)。後者の研究ではゼロ代名詞の解釈という統語的な側面が問題とされるのに対し、前者の研究では指示対象の回復可能性(retrievability)よりも、テキストの結束性(より具体的には主題連続)が問題とされる。前者の研究の長所は考察が段落等のテキストの大構造(macro-structure)の解明に役立つ可能性を持っていることである。一方、短所としては一般化された記述が難しいということがある。例えば、甲斐ますみ(1995)の言う小談話(small discourse, SD)は心理言語学等で盛んに論じられているフレーム、スクリプトという概念に近いものかと思われるが、それらの概念が持つのと同様の問題点、即ち、ある要素が特定のフレーム／スクリプト内に存在するかしないか、あるいは、フレーム／スクリプトの中心的な要素か周辺的な要素かといったことが極めて個別的にしか扱えないといった問題点を持っている(ただし、テキスト処理におけるフレーム／スクリプトの心理的実在性は Garrod, S. C. & Sanford, A. J. (1982)その他数多くの研究から明らかである)。一方、後者の研究は本質的に統語論的アプローチなので、前者のタイプのアプローチを行うための前提条件にはなり得てもそれ自体

がテキストの構造の解明に資することはあまりないと考えられる。

4-2-3. 名詞と結束性—語彙的結束性をめぐって—

先にフレーム／スクリプトに基づく研究の問題点を指摘したが、それに関連するのが「語彙的結束性(lexical cohesion)」という概念である。語彙的結束性とは、単語(多くの場合名詞)が持つ語彙的意味に基づいて結束性が成り立つことを言う。これに関しては、Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976)が詳しく述べているが、彼らも指摘しているように英語の場合は語彙的結束性が単独で発現することは通常なく、普通冠詞などの他の結束装置の助けが必要とされる。この点に関して、日本語はやや様相を異にする可能性がある。例えば、(27)には名詞の省略や接続表現など結束性を保証する要素は何もない。従って、a. b. 両文が結束性を持っているのは「著者」という名詞の力によると考えざるを得ない。しかも類似した意味でありながら「作家」にはそうした能力がない。

(27) (a)先日小説を買って読んだ。(b)著者／*作家の作品は鋭い社会批判を含んでいる。

庵功雄(1995b)はこれを、「著者」という名詞が一般の述語と同様に「項」を必要とする「1項名詞」であるのに対し、「作家」はそれを必要としない「0項名詞」であるためであるとしている。つまり、日本語では名詞の統語的性質のみによって結束性が保証され得るのである。この「1項名詞／0項名詞」という考え方は仁田義雄(1977)の「不定時を基準時とする相対的時名詞」という概念に示唆を受けたものである。なお、この両者の区別に類似した概念に西山佑司(1990)の「非飽和名詞句／飽和名詞句」があるが、西山の興味は文文法にあるのに対し、庵の興味はテキストレベルにある。

4-2-4. テンス・アスペクトとテキスト・タクシス—

現代日本語のテキスト文法を考える上で欠かせないのが工藤(1995)の研究である。工藤は同書で、Jakobson, R. (1957)の「タクシス」という概念を用いて日本語のテキストにおけるテンス・アスペクト形式の機能を論じている。それによれば、小説の地の文のような「かたり(narrative)」のテキストではル形とタ形というテンス形式が持つダイクシス的対立は多くの場合失われる。一方、アスペクト形式としてのル形／タ形(完了相(perfective))は「継起性」というタクシスを示し、テイル形／テイタ形(未完了相(imperfective))は「同時性」というタクシスを表す。工藤の研究は、Jakobson, R. (1957)、Weinrich, H. (1964)、Benveniste, É(1966)、Hopper, P. J. (1979)等の影響を受けて書かれているだけに、その記述には類型論的妥当性を持つ部分が多いと考えられる。また、本文中で言及されている、テキストタイプによる違いという問題も今後の重要な研究テーマとなるものと思われる。

4-2-5. その他

上述の工藤の研究は文法カテゴリーのテキストにおける変容の例とも見られる。同様の研究にモダリティ形式のテキスト内での機能を考察した仁田義雄(1995, 1996)がある。また、「のだ」の連文的機能を論じた霜崎実(1981)、吉田茂晃(1987)等も興味深い。その他の文法カテゴリーとしては能動—受動というボイス対立のテキスト内での機能も考察する価値であろう。これに関しては、Jespersen, O. (1924:168)が受動態使用の理由の一つとして「他の文とのつながりを容易にする」という点を挙げているが、それを具体的には論じていない。

一方、これは文法カテゴリーの問題ではないが、テキストにおける「主題」という概念をどう考えるかというのも重要な問題である。例えば、(28)a. を無題文、(28)b. を有題文とするのは問題ないと思われるが、(28)c. や(28)d. の文頭の「その駅」(Halliday, M. A. K. (1985)の言う"theme"に当たる)をどのように位置づければよいのかといったことは、特に(28)d. のように文中に他の「NPは」が存在する場合には問題となると思われる。

- (28) a. 太郎がその駅から来た。
- b. 太郎はその駅から来た。
- c. その駅から太郎が来た。
- d. その駅から太郎は来た。

この他の重要な研究としては分裂文のテキスト内の機能を論じた砂川有里子(1995)が挙げられる。砂川の論文は、「AノハBダ」「AノガBダ」という二つのタイプの分裂文を、A、Bを占める要素の予測可能性及び先行詞からの持続距離(ベケシュの論文を論じた際に言及した RD)という尺度で捉えようとした先駆的な研究であり観察結果も興味深い。こうした研究が積み重なっていけば、テキスト内での情報の受け継がれ方やテキスト内での「は」と「が」の機能等がより明らかになると思われる。

5. 今後の課題

本節では、テキスト文法／テキスト言語学が今後向かうべき方向性についての私見を述べて全体の結びとしたい。

論者は先に、テキスト文法とテキスト言語学の関係を(I)のように規定した。

- (I) テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法的現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者持つ一般化が可能な規則(rule)の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理(principle)の総体」を扱う「運用論」とは区別される。

つまり、「テキスト文法」は(重要なものではあるが)「テキスト言語学」の部分なすにすぎないとするのである。では、「テキスト言語学」とは何を扱うものなのであろうか。論者はそれについて次のように考えている。

- (II) テキスト言語学は、実時間内という制限された条件下で人間が行っているテキスト処理の過程の解明を主目的とする学問分野である。

3-1. で de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981)について論じた際、言語知識は「潜在的体系」であるのに対し、テキストは「実現的体系」とであると述べた。これは換言すれば、文法は時間の制約と独立に研究してもよいが、テキスト言語学においてはそれだけでは不十分で、極めて短時間で言語処理が可能であるのはなぜかという問いに答えられなければならないということである。こうした問題意識から見た時、極めて示唆的なのが寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」である。

寺村は、次の(29)を「その先生は」「その先生は私に」というように順に提示していき、そのたびにその後を続けて文を完成させるという実験を行っている。

- (29) その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。(夏目漱石「こころ」)

その結果、「その先生は」の段階では極めて多様であった予測の範囲が、「その先生は私

に」の段階で既に「言う」類「くれる」類の動詞の過去形で終わる」という形に収斂していることが分かった。この結果は極めて示唆に富む。

文文法の世界では殆ど問題にされることはないが、人間の実際の言語処理を考えた場合、「文」という単位の同定は決して簡単なものではない。特に、話し言葉では文がどこで終わるかは厳密には予見できない。従って、構文解析は入力された要素を対象に線条的に行わざるを得ないため失敗も起こり得る(文文法でこうしたことが問題にならないのは、書かれたものであるにせよないにせよ言語形式が「文」という単位の下に提示されることが予め前提とされているためである)。もしこの失敗が度重なるようだとコミュニケーションは著しく阻害されることになるが、実際にはそうしたことは殆どない(de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981)は、実際の言語処理において統語構造(彼らの言う「結束性」)が意識化されることは殆どなく、注意は専ら意味的な関係(彼らの言う「一貫性」)に向けられていると述べている)。それは、母語話者が次にどのような要素が現れるかということについて(おそらく経験的に)高い予測能力を持っているからに他ない。この予測能力について考える場合に重要な役割を果たすであろうと考えられるのは動詞の結合価である。実際、動詞が決まればその動詞がとる項の予測される範囲はずっと小さくなる(しかも、多くの言語において主語は述語に先行するから予測可能性はより高まる)。ただし、これを文字通りに取ると、SVO型の言語の方が、SOV型の言語よりも処理効率がよいということになってしまう。しかし実際は柴谷方良(1981)が指摘するように世界の言語で最も多いのはSOV型である。ということは、動詞が最後に現れるということが実際の談話処理の障害となっていないはずである。寺村秀夫(1987)が示唆しているのはこの事実である。

では、上述のような観点を採るときに重要になるのはどのような研究であろうか。

第一に挙げられるのは心理言語学的アプローチである。実際、上述のような文解析やテキスト解析の問題は心理言語学において極めて精力的に行われている(日本語に関する心理言語学的研究については Kess, J. F. & Miyamoto, T. (1994)の詳細な文献目録が役に立つ)。

第二に挙げるべきなのは音声・音韻論的研究である。文が常に発音されるものである(書き言葉においてもそれを内話という形で発音することに代わりはない)ということ、特に話し言葉では音声以外に頼るべき情報がないということを考える時、テキスト処理に音声的情報は不可欠である。そうした観点から重要であると考えられる研究に、杉藤美代子(1980,1989)、郡史郎(1989)、土岐哲(1992)、Maekawa, K. (1993)、妻木淳子(1994)等がある。

この内、杉藤美代子(1980)「アクセントのとらえ方」は「桃太郎」の日本語版とその英語訳を用意し、英語母語話者には英語版を、日本語母語話者には英語版と日本語版をそれぞれ読んでもらいその特徴を調べたものである。その結果、英語話者は新情報の‘peach’を高く読んだのに対し、日本語話者は英語を読むとき、非初出の‘peach’をむしろ高く言う傾向が見られ、この傾向は日本語話者が日本語を読んだときにも非初出の「桃」をむしろ高く言うという形で現れた。このように、日本語と英語とでは話し言葉における音声レベルでの結束性のあり方がかなり異なる可能性があるのである。杉藤の研究ではテキスト理解におけるポーズの重要性を論じた杉藤美代子(1989)等も重要である。

一方、Maekawa, K. (1993)や妻木淳子(1994)は、前提—焦点関係によって作り出されるフォーカスである「外部フォーカス」(典型的には久野暉(1973)の言う総記の場合。これに関する音韻論的議論については郡史郎(1989)を参照)と、文脈自由な場合に特定の統語上の要

素に置かれるフォーカスである「内部フォーカス」とを区別することが可能であることを論じたものである。内部フォーカスの実在性には若干疑問の余地があるが、これらの研究が文のイントネーションの研究を活性化したことは疑い得ない。一方、土岐哲(1993)は(30)(31)という2文を日本人母語話者(東京出身と大阪出身)及び日本語学習者(中国語、韓国・朝鮮語、タイ語の母語話者)に読んでもらったテープから下線部を取り除いたものを作成し、下線部の情報が正確に回復できたかを調べたものである。

(30) 何が見えますか(WH 疑問文)

(31) 何か見えますか(Yes-No 疑問文)

その結果、東京出身者の発話の回復率が極めてよいことが分かった。これは、東京出身者の発話はイントネーションパターンが明瞭である、即ち重要度の低い要素の抑え込みが強い(cf. Pierrehumbert, J. B. & Beckman, M. (1988))ため、主語にプロミネンスが置かれる(30)と述語にプロミネンスが置かれる(31)の違いが明瞭になるためだと考えられる。

このように統語現象と音韻情報の間には極めて密接な関係が認められる。そうである以上、今後望まれるのは文法論と音声・音韻論の共同研究であろう。そうした観点から重要と考えられる研究に、終助詞等の文末形式の意味と文末イントネーションの関係を論じた森山卓郎(1989c)や、連体修飾節の解釈の違い(制限的(限定)か非制限的(情報付加)か)と音調の関係に言及した金水敏(1986)がある。ここでは後者について簡単に言及しておく。

(32)のような普通名詞を主名詞とする連体修飾節には制限的な解釈と非制限的な解釈があり、解釈は文脈によって決まる。各々の例は(33)(34)である(例は金水敏(1986)より)。

(32) 息子が好きな映画

(33) 今度どんな映画を見ようかと家族で相談した結果、今回は(a)息子が好きな映画を見ることにした。(制限的)

(34) 日曜日に何をしようかと家族で相談した結果、今回は(a)息子が好きな映画を見ることにした。(非制限的)

つまり、(33)では「映画」が旧情報で「息子が好きな」の部分が情報上の焦点になっているためこの部分は「制限的」修飾節と解釈されるのに対し、(34)では「映画」が既に新情報になっているため「息子が好きな」の部分は主名詞に情報を付加する「非制限的」修飾節と解釈される。換言すれば、(33)では「息子が好きな」の方が「映画」よりも情報の重要度が高いのに対し、(34)では「映画」の方が「息子が好きな」よりも情動的価値が高い。そして、それに対応して、(33)では「息子が好きな」の部分にプロミネンスを置いた発話が適格になるのに対し、(34)ではそうした発話は不適格になるのである。

その他にも学習者言語の分析も重要なものになるであろうと思われる。特に、それを誤用分析(error analysis)という静的な観点からではなく、中間言語(interlanguage)という動的な枠組みで分析することが必要になるであろう。

問題とすべき対象はまだ多いと思われるが、本稿の記述は以上で終わることにする。

【引用文献】(紙幅の関係上副題は省略する)

- 庵 功雄(1994)「結束性の観点から見た文脈指示」『日本学報』13 大阪大学
 庵 功雄(1995a)「テキストの意味の付与について」『日本学報』14 大阪大学
 庵 功雄(1995b)「語彙の意味に基づく結束性について」『現代日本語研究』2 大阪大学
 庵 功雄(1996)「指示と代用」『現代日本語研究』3 大阪大学
 池上嘉彦(1982)「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書11 談話の教育と研究Ⅰ』国立国語研究所
 池上嘉彦(1984)「テキストと言語学」『言語生活』393
 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
 大野美代子(1978)「文章に使われた指示語」『東京女子大学日本文学』48 東京女子大学
 甲斐ますみ(1995)「省略のメカニズム」『岡山大学留学生センター紀要』3 岡山大学
 神尾昭雄(1985)「談話における視点」『日本語学』4-12
 神尾昭雄(1990)「情報のなわばり理論」大修館書店
 川越奈穂子(1995)「ところで、話は変わるけど」仁田義雄編『複文の研究(下)』くろしお出版
 北野浩章(1989)「しかし」と「ところが」『言語学研究』8 京都大学
 木村英樹・田窪行則(1992)「中国語、日本語、英語、フランス語における3人称代名詞の対称研究」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版
 金水 敏(1986)「連体修飾成分の機能」松村明教授古稀記念会編『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
 金水 敏(1988)「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学(国文篇)』39 大阪女子大学
 金水 敏(1992)「談話管理理論から見た「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19 神戸大学
 金水 敏(1993)「言語学の最新情報ー日本語学 終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4
 金水 敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 講談社サイエンティフィック
 金水 敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」金水敏・田窪行則編(1992)『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
 久野 暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
 久野 暲(1978)『談話の文法』大修館書店
 久野 暲(1983)『新日本文法研究』大修館書店
 黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・ア」について『英語と日本語と』くろしお出版
 郡 史郎(1989)「強調とイントネーション」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育』2 明治書院
 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)』秀英出版
 国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2)』秀英出版
 佐伯哲夫(1967)「接続語の機能」『講座日本語の文法4 文法指導の方法』明治書院
 坂原 茂(1985)『認知科学選書2 日常言語の推論』東京大学出版会
 坂原 茂(1989)「メンタルスペース理論概説」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
 佐久間まゆみ(1990)「接続表現、提題表現、文章の構造類型」寺村秀夫他編『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社
 佐久間まゆみ編(1989)『文章表現と要約文の諸相』くろしお出版
 佐治圭三(1970)「接続詞の分類」『月刊文法』2-12
 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構」『言語研究』108
 ザトラウスキー=ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析』くろしお出版
 柴谷方良(1981)「日本語は特異な言語か」『月刊言語』10-12
 清水佳子(1995)「主題の省略と顕現から見た文連鎖の型」『待兼山論叢』29 大阪大学
 霜崎 実(1981)「ノデアル」考『Sophia Linguistica』7 上智大学
 白井賢一郎(1991)『自然言語の意味論』産業図書
 杉藤美代子(1980)「アクセントのとらえ方」『応用言語学講座2 外国語と日本語』明治書院
 杉藤美代子(1989)「談話におけるポーズとイントネーション」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院
 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文藝言語研究(言語篇)』18 筑波大学
 砂川有里子(1995)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『複文の研究(下)』くろしお出版

- 高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 田窪行則(1990a)「対話における知識管理について」『東アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 田窪行則(1990b)「対話における聞き手領域の役割について」『認知科学の発展』3 講談社サイエンティフィック
- 田窪行則(1992)「談話管理の標識について」『文化言語学』三省堂
- 田窪行則(1993)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 田窪行則・金水 敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3
- 塚原鉄雄(1968)「接統詞」『月刊文法』1-1
- 妻木淳子(1994)「標準語のイントネーション」1993年度大阪大学修士論文
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3
- 土岐 哲(1992)「音声上の虫食い文補填の手掛かりとなる韻律的要素」カッケンブッシュ寛子他篇『日本語研究と日本語教育、竹内俊男教授退官記念論文集』名古屋大学出版会
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書院
- 永野 賢(1972)『文章論詳説』朝倉書店
- 永野 賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 西山佑司(1979)「新情報・旧情報という概念について」『昭和54年度科学研究費補助金特定研究(1)課題番号410219 日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- 西山佑司(1983)「語用理論における関連性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』15 慶應義塾大学
- 西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22 慶應義塾大学
- 西山佑司・上林洋二(1985)「談話文法は可能か」『昭和59年度文部省科学研究費補助金特定研究(1)課題番号59101007 明確で論理的な日本語の表現(最終報告)』
- 仁田義雄(1977)「「文の文法」から「文を越える文法」へ」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社
- 仁田義雄(1995)「テキストの中の文のテンス・モダリティ」『現代日本語研究』2 大阪大学
- 仁田義雄(1996)「語り物のモダリティ」『阪大日本語研究』8 大阪大学
- 野田尚史(1996)『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 蓮沼昭子(1991)「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4 姫路獨協大学
- 蓮沼昭子(1995)「談話接統語「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』8 姫路獨協大学
- 畠 弘巳(1980)「文とは何か」『日本語教育』41
- 浜田麻里(1991)「「デハ」の機能」『阪大日本語研究』3 大阪大学
- 浜田麻里(1993)「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 国際交流基金日本語国際センター
- 浜田麻里(1995a)「トコロガとシカシ」『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター
- 浜田麻里(1995b)「いわゆる添加の接統語について」仁田義雄編『複文の研究(下)』くろしお出版
- 林 四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- ベケシュ・アンドレイ(1987)『テキストとシンタクス』くろしお出版
- ベケシュ・アンドレイ(1995)「日本語における照応の語用論」仁田義雄編『複文の研究(下)』くろしお出版
- 堀口和吉(1978)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学
- 三尾 砂(1942)『話言葉の文法(言葉遣篇)』帝国教育会出版部(くろしお出版から復刊(1995))
- 三上 章(1953)『現代語法序説』刀江書房(くろしお出版から復刊(1972))
- 三上 章(1970)『文法小論集』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1995)「文章・文体(理論)」『国語学の五十年』武蔵野書院
- メイナード泉子(1993)『日英語対照研究シリーズ2 会話分析』くろしお出版
- 森山卓郎(1989a)「コミュニケーションにおける聞き手情報」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎(1989b)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学
- 森山卓郎(1989c)「文の意味とイントネーション」宮地裕編『講座日本語と日本語教育1 日本語要説』
- 安井 稔・中村順良(1984)『現代の英文法10 代用表現』研究社出版
- 山田敏弘(1996)「日本語の参与者追跡システムについて(1)」『現代日本語研究』3 大阪大学
- 山森良枝(1990)「接統詞の二類型と談話の情報構造」『日本語学』9-5

- 吉田茂晃(1987)「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』21 神戸大学
- 渡辺 実(1971)『国語構文論』塙書房
- Barwise, Jon & Perry, John(1983) *Situations and Attitudes*. The MIT Press (土屋俊他訳(1993)『状況と態度』産業図書)
- Benveniste, Émile(1966) *Problèmes de Linguistique Générale*. 1 Édition Gallimard (岸本通夫監訳(1983)『一般言語学の諸問題』みすず書房)
- Brown, Gillian & Yule, George(1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press
- Chafe, Wallace(1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. The University of Chicago Press
- Clancy, Patricia. M. & Downing, Pamela(1987) "The Use of WA as a Cohesion Marker in Japanese Oral Narratives" in Hinds, J., Maynard, S. K. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization*. (Typological Studies in Language 14) John Benjamins
- Comrie, Bernard(1989) "Some General Properties of Reference-Tracking System" in Arnold, D. et al. (eds.) *Essays on Grammatical Theory and Universal Grammar*. Oxford
- de Beaugrande, Robert-Alain & Dressler, Wolfgang, U. (1981) *Introduction to Text Linguistics*. Longman (池上嘉彦他訳(1984)『テキストと言語学入門』紀伊国屋書店)
- Fauconnier, Gilles(1984) *Espaces Mentaux*. Éditions de Minuit (坂原茂他訳(1987)『メンタルスペース』白水社)
- Firbas, Jan(1964) "On Defining the Theme in Functional Sentence Perspective" *Travaux Linguistiques de Prague* 1
- Firbas, Jan(1992) *Functional Sentence Perspective in Written and Spoken Communication*. Cambridge University Press
- Foley, William, A. & Van Valin, Jr. Robert, D. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge University Press
- Garrod, S. C. & Sanford, A. J. (1982) "The Mental Representation of Discourse in a Focused Memory System" *Journal of Semantics*. 1-1
- Givón, Talmy(1983) "Topic Continuity in Spoken English" in Givón, T. (ed. 1983)
- Givón, Talmy(ed.1983) *Topic Continuity in Discourse*. (Typological Studies in Language 3.) John Benjamins
- Grice, Paul, H. (1975) "Logic and Conversation" in Cole, P. & Morgan, J. L. (eds.) *Speech Act*. (Syntax and Semantics 3) Academic Press
- Halliday, Michael, A. K. (1967) "Transitivity and Theme in English(part II)" *Journal of Linguistics*.
- Halliday, Michael, A. K. (1970) "Linguistic Structure and Language Function" in Lyons, John(ed.) *New Horizons in Linguistics*. Penguin Books Ltd.
- Halliday, Michael, A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold
- Halliday, Michael, A. K. & Hasan, Ruqia(1976) *Cohesion in English*. Longman
- Hinds, John(1983) "Topic Continuity in Japanese" in Givón, T. (ed.1983)
- Hinds, John & Hinds, Wako(1979) "Participant Identification in Japanese Narrative Discourse" in Bedell, G, Kobayashi, E. and Muraki, M. (eds.) *Explorations in Linguistics*. Kenkyusya
- Hopper, Paul, J. (1979) "Aspect and Foregrounding in Discourse" in Givón, T. (ed.) *Discourse and Syntax*. (Syntax and Semantics 12) Academic Press
- Jakobson, Roman(1957) "Shifters and Verbal Categories" Reprinted in Waugh, Linda, R. & Monville-Burstion, Monique(eds.) *On Language*. Harvard University Press
- Jespersen, Otto(1924) *The Philosophy of Grammar*. The University of Chicago Press (半田一郎訳『文法の原理』岩波書店)
- Kamp, Hans & Reyle, Uwe(1993) *From Discourse to Logic*. Kluwer Academic Publishers
- Kamiloff-Smith, Annette(1980) "Psychological Processes Underlying Pronominalization and Non-Pronominalization in Children's Connected Discourse" *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora*. Chicago Linguistic Society
- Kess, Joseph F. & Miyamoto, Tadao(eds.1994) *Japanese Psycholinguistics*. (Library and Information Sources in Linguistics 24) John Benjamins
- Kuno, Susumu(1987) *Functional Syntax*. The University of Chicago Press
- Leech, Jeffry(1983) *The Principles of Pragmatics*. Longman(池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店)

- Maekawa, Kikuo(1993) "Perception of Intonational Characteristics of WH and Non-WH Interrogatives in Tokyo Japanese" 水谷修他編(1993)『文部省重点領域研究(日本語音声)D 1 班研究成果発表論集 平成4年度研究成果報告書』
- Maynard, Senko, K. (1993) *Discourse Modality*. John Benjamins
- Ochs, Elinor(1979) "Planned and Unplanned Discourse" in Givón, T. (ed.) *Discourse and Syntax*. (Syntax and Semantics 12) Academic Press
- Pierrehumbert, Janet, B. & Beckman, Mary(1988) *Japanese Tone Structure*. The MIT Press
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel and Jefferson, Gail(1974) "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" *Language*. 50
- Schiffrin, Deborah(1987) *Discourse Markers*. (Studies in International Sociolinguistics 5) Cambridge University Press
- Sinclair, J. McH. & Coulthard, M. (1975) *Toward an Analysis of Discourse*. Oxford University Press
- Sperber, Dan & Wilson, Deirdre(1986) *Relevance*. Harvard University Press (内田聖二他訳(1993)『関連性理論』研究社出版)
- Stubbs, Michael(1983) *Discourse Analysis*. Blackwell(南出康世・内田聖二訳(1989)『談話分析』研究社出版)
- Tannen, Deborah(1984) *Conversational Style*. Ablex
- van Dijk, Tuen, A. (1977) *Text and Context*. Longman
- van Dijk, Teun, A. (1979) "Pragmatic Connectives" *Journal of Pragmatics*. 3
- van Dijk, Tuen, A. (1981) *Studies in the Pragmatics of Discourse*. Mouton
- Weinrich, Harald(1964) *Tempus*. Kohlhammer(脇坂豊他訳(1984)『時制論』紀伊国屋書店)
- Weinrich, Harald(1976) *Sprache in Texten*. Stuttgart, Klett Verlag(脇坂豊他訳(1984)『言語とテキスト』紀伊国屋書店)
- Widdowson, H.G.(1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford University Press
- Yoshimoto, Kei(1986) "On Demonstratives KO/SO/A in Japanese" 『言語研究』90(=吉本啓「日本語の指示詞コソアの体系」金水敏・田窪行則編(1992)『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房)